

談話室

消滅の危機からの復活

秋の早い夕闇に包まれ、一日の仕事を終えた人たちが夕食の支度に取り掛かったその瞬間、「突き上げるような激しい揺れ」に襲われた。2004年(平成16年)10月23日、新潟県中越地方を震源とする大地震は、人口2,200人(中越地震前)の小さな山古志村(現・長岡市山古志地区)を一気に押しつぶした。

後に被災村民の手記をもとに編集、出版された『帰ろう山古志へ』(新潟日報事業社刊)には、突然襲った自然の猛威になす術もなく、「これからどうなるのか、どうしたらいいのか」と悲嘆にくれるその時の思いがつつられている。

それまで平和に暮らしていた人々の生活が、一夜にして失われた。全村避難を決断することになった当時の村長、長島忠美衆議院議員はこの本の巻頭での寄せ書きで、「すべての人が絶望の淵に立たされることになりました」と書いている。村は消滅の危機に立たされたのである。

しかしその後、長島村長を先頭に「帰ろう山古志へ」のスローガンが叫ばれ、大地震から2年5か月後には避難指示の全面解除にこぎつけ、村は復活した。もっとも村そのものは地震の翌年に長岡市に編入・合併され、正式には村ではなくなった。だが、長年共に暮らしてきた地域の絆は揺るぐことなく、筆者が2年後の9月に棚田の視察で現地を訪れた時も、会う人ごとに「全村復帰」の熱気が感じられた。

何が村長をはじめ、村人たちを突き動かしたのだろうか。東日本大震災の直後にお会いした際、長島氏は「避難するにあたって村民は、先祖が拓き、暮らしてきた故郷を何よりも大切に思っていると感じた」と話していた。「村を捨てるのではない、必ず戻って緑の村を取り戻す。山古志に戻るようにすることが、避難を指示した村長としての住民への責任だ」。避難のヘリコプターに最後に乗り込んだ長島氏は、何としてもこの村に戻ることを、その時決意したという。

棚田の説明をしていた村の人から、「あの山は地震で谷のほうにずれてしまっ

た」と聞かされ、村を襲った地震の破壊力の恐ろしさに身震いした。インフラは全く機能しない。いたるところで地滑りを起こし、川がせき止められて自然のダムができていた。これがいつ決壊するかわからない。そんな状況でも故郷に帰りたいと強く願う。故郷が消滅するかもしれないその時に故郷を愛する思いが一層募り、これまで生きてきた土地がどこよりも愛おしくなる。長島氏と話していて、改めて人にとって長い間生活を営んできた土地の大切さと愛着の強さを感じさせられた。

今、巨大地震とそれに続く津波、原子力発電所の事故で、止む無く故郷を後にした人々の思いも同じであろう。必ず戻って、緑の村、住み慣れた町を取り戻したいという、切なく、強い思いで日々を過ごしているに違いない。

東日本大震災から間もなく3か月が過ぎようとしている。数々の復興策の策定が進められ、被災地は復興に向けて動き出している。だが、そこにはこうした被災者の強い思いが活かされているのだろうか。

長島氏は、理想的な農村、漁村、住宅地の整備だけが復興ではない、と警鐘を鳴らす。自らの経験から、生業(なりわい)、コミュニティー、そして歴史、文化が伴わないと復興したことにはならないという。暮らしのための地域を取り戻すことが必要だというのである。消滅の危機から復活した背景には、山古志の人々がこのことに気付いたことがあるのではないか。

理想郷の整備だけでは、被災した人々の生活の場であった地域への思い、人のつながり、生業としての産業などが見えなくなる恐れがある。東日本大震災の被災地の復興にあたって長島氏は、「復興には現場主義が必要だ。農地や浜のこと、地域をよく知る人が必要だ」と指摘する。

今回の大地震の被災地はもともと、食と農と観光と環境に関しては、大きな資源を持つ。それらの資源を生かすためにも、「帰ろう、私たちの村、町に」の強い決意と、現場をよく知る人々の熱意が強い武器になる。被災者が再び生き生きと暮らしていける故郷の復活を心から祈ってやまない。

((株)農林中金総合研究所 顧問 野村一正・のむら かずまさ)